

第27回 小野十三郎賞受賞記念対談

詩集『ノックがあつた』からの
詩のふた

詩の広がり

受賞者・岡本 啓
聞き手・近藤久也

●詩は誰のために書くか

近藤あらためて、小野十三郎賞の受賞おめでとうございます。

岡本 あり、かと云ふ事です

近藤 こういふのは慣れていたので、いろいろお伺いすることをメモしてきました。岡本さんはこれまでいろいろな賞を受賞されていますが、賞の受賞は、岡本さんの詩作になにか影響を及ぼすことはありますか？

岡本 単純なことですが、いただいたときに

はすごく嬉しい。それがまずあって、あとはそれぞれの賞には選者の方々がいらっしゃつ

て、その方が話しあつて決めるものだと思うので、その選者の方々にしつかり読んでもらえた、そういう気持ちになりますね。賞の名前と受賞者だけを眺めると、賞は神様から

見えられるような感じもするんですが、結局選んでいるのは人なので、その人に詩集を読んでもらえた、そういう気持ちがそれぞれの賞にあります。

そこで人が読んでどう感じるかを考える時間が、創作のなかに今はかなりあります。が、創作のなかに今はかなりあります。

岡本 それでも実は、言葉が持つ感性的な側面みたいなものは、どんな人の言葉や文章のなかにも実は隠れている。その力を、自分が詩作するときに、ふだん詩を読まない人にも「こういうものが詩としてあるんだよ」と伝えていきたい、という気持ちはありますね。近藤 じゃあ今現在、詩を書かれるときは、ある程度読者を意識されているということですね。

岡本 一方で、具体的に読者を意識しているわけでもないですね。書いた自分自身が一人

岡本 そうですね、ダイレクトなメッセージではないと思うんですけど、社会のなかで詩はこれまでもずっとある位置を占めてきた。それが今の時代には見えにくくなっている。

近藤 なるほど。授賞式の日に岡本さんが、授賞式は苦手だと仰っていたのが印象に残っていて、お聞きしたかったです。それとちよつと繋がる話ですけど、私の感じでは、詩は自分のために書かれるものであるという、ひとつの詩論のような言説が昔からあります。岡本さんはどうですか。自分のために書くという感じはありますか。

岡本 読んでいる人がどう読んでいるかを考えるということは初期からあつたんですが、今のほうが、詩によって現代人は何ができるかをより考えるようになっています。詩は、とくに自由詩は、日本社会のなかで大きな位置を占めていないと思いますが、詩は何ができるかという視点で書き続けることで世の中を知らせられることがあるんじゃないかなと思っています。

で読んで、一人で満足するものだつたらどんどん書けるんです。でもそれだと誰も楽しんでもれない。あくまでぼく個人のなかで、詩は今の時代はこう書くべきだというものがある。ただ、それは周囲から影響を受けて考へつくものです。そういう意味では、社会といえばいいのか自分より大きなものによつて書かされているといえるかもしれません。

近藤 詩作するとき、「現代詩手帖」から依頼があつたり、何かの雑誌から依頼があつたときに、読む人はどんな人だろうかとか、そういう意識はありますか。

岡本 ある程度あります。「現代詩手帖」だったら何書いてもいいや、という気持ちがあります(笑)。自分が本当に書きたくて、別に誰も読みたくないようなものでも、「現代詩手帖」なら書いていいかな、と。

近藤 今回の詩集を最初に手に取らせていたいたとき、「ノックがあつた」というタイトルがすごく良いと思いました。

岡本 ありがとうございます。

近藤 それから読ませていただき、「あとがき」でも触れられていまつたけど、その「ノックがあつた」っていうのは岡本さんに對して、広い意味で世界から何かノックがあつた、あるいは今の政治的な状況とかも含んだ、ある状況からノックがあつた、あるいは

岡本さんが元々持つてられる、岡本さんの内側にある言葉からのノックがあつた——いろんなふうに取れるんですけれど、作者としては今の時代はこう書くべきだというものがある。ただ、それは周囲から影響を受けて考へつくものです。そういう意味では、社会といえばいいのか自分より大きなものによつて書かされているといえるかもしれません。

近藤 詩作するとき、「現代詩手帖」から依頼があつたり、何かの雑誌から依頼があつたときに、読む人はどんな人だろうかとか、そういう意識はありますか?

●「はだかのことば」とボエジー

岡本 今言つてくださつたものは全部考えてるんですけど、特に自分で中で、詩を書き始めてからの驚きという部分では、自分が單にぱつと書いた言葉、自分の中に元々あつたと言つていいのかわからないけど、ぱつと書きつけた言葉が、書きつけた途端に、自分以外の人が使つてゐるごく一般的な言葉になつて、それが自分に跳ね返つてくる。詩を書くまで創作をしたことがなかつたので、詩を書き始めてからそこにすごい驚きがあつた。

そのニュアンスを込めたいなという気持ちがあつた。

近藤 なるほど。他者からの反応ですね。

岡本 そうですね、自分の言葉が他者の言葉に変わつてしまつという驚きですね。

近藤 今回の詩集の中の「鳴動」という詩の中に「はだかのことば」というのがあつて、それも気になつたんです。この「はだかのことば」というのは岡本さんの詩の結構本質的な言葉なんじやないかなと勝手に思いました。私はね、言葉は本来実在するものの例えであ

つて、言葉自体が元々比喩であるような感じを持つてゐます。それに対しても岡本さんが出している詩の言葉は、何か例えとか喩になる以前の、もつと原初的な言葉、音に近いような感じ、そういう感じを持つたんですけど、その辺はどうですか。

岡本 この「鳴動」の中でもそうなんですが、「はだかのことばなんてあるのかな」と書いていて、「はだかのことば」といえるものがあるかどうか、それについて今も迷つてゐる状態です。「はだかのことば」——純粹なことば、ことば以前のことばのようないふしも関わることかと思うんですけど、そもそも詩に興味がなくて、突如二十代後半から書き始めた者としては、ボエジーというものに對して書き始める前にすごく不信感があつた。そんなものあるのかつていう(笑)。

だけど、詩を書くときに、ボエジーが世の中にあるんじやないかと思つた方が書きやすいういうのがあつた。そこで、これは一体どういうことだろうと、そう今も考へている最中です。言葉では表現できない詩、ボエジーみたいなもの。いわゆるプラトンのイデアみたいなもの。それはやっぱり今の自分からしても、ちょっと何かうさんくさいもののような気がするし、だけど同時にそれは詩を書か

せる力になつてゐる。書き始めてみるとたしかに現実には、そこに詩があると言つちやつてから深まることがあるな、という実感もあります。あるかないかわからないもの、「はだかのことば」というのは、そういうものの別の言い方でもあるかと思います。

もうひとつちょっと違う話ですが、自分が詩を書き始めたとき、二〇一一年ぐらい、朝日新聞のウェブ版に、ボクシングの内藤大助さんの、いじめられている子へのメッセージといつた、多分インタビューの書き起こしが載っていました。その記事のなかに、自分がすごく幼い頃貧しくて、周りからボンビームみたいな貧乏という言葉を逆にしたようなからかわれ方をしていて、なんで自分がそういうことを言われるのかわからなかつた、というエピソードがあつた。それを読んだときには、内藤さんのつらい幼少期の話ではあるんですけど、自分がいじめられている理由がわからなかつたというところに、すごく詩的な力を感じた。それは別に詩として書かれたものじゃなくて、単なるインタビューを書き起こして誰かが編集したもののなかに力があるなと思った。そういうことが「はだかのことば」だという側面もあるかと思います。

近藤 僕の印象では、今岡本さんが話された

ように、前提として叙情というのを置いていない詩であるように読めたんですね。岡本さんが発せられる言葉は、何か刹那的な言葉、それがひよつとしたら叙情的でない言葉なのかもわからないけれど、何か言葉の僕さみたいものが自然にぱつと出ているような印象を受けました。岡本さんと前回お話ししたとき、詩のリーディングをよくされているつておつしやつていたんですけど、リーディングをよくされる詩人は、そういう言葉の瞬発的な力に重きを置いておられる。僕はそういう印象です。そういう面はあるんですね。

岡本 そうですね、リーディングをするようになつたのはここ最近で、この詩集だと特に声にして読んでいる詩が多いので、今、近藤さんがおつしやられた通りなんだと思います。ただ元々リーディングが実はそんなに好きではなかつた。書き言葉と読む言葉は、全く違う種類のものじゃないですか。だから、書き言葉を書き言葉として目で見たときの良さを最大限生かした方がいいんじゃないかという考えはあるんですけど、ただ、詩を書き始めた當時に、白石かずことか吉増剛造とかの世代の詩人に憧れて書いていて、彼らの詩と生き方に憧れているところがあるので、避けては通れないだろうと、それでやつてゐるところはあります。

近藤 なるほど。岡本さんの詩つて初期の吉増剛造さんの『黄金詩篇』とか、あのへんの言葉の感触とよく似ているなと思つたんですけど、それはやっぱり、言葉そのものに対する不信、言葉が持つてゐる比喩みたいなものをあんまり信用されていない、そういう面があるんですね。

岡本 そうですね、比喩以前にそもそも詩をあんまり元々信用してなかつたということがあります。だけど、それが最近変わってきました。詩もいいもんだなと思い始めたのは、子供が生まれて、子供が何かごっこ遊びをして、河原で石とかをパンに見立てて遊んでいて、実は詩というのはそれを大人になつてもやつてはいるだけなんじゃないかっていうふうに思いました。というのも、石の外側にパンというものの概念をかぶせて、あたかもそれをそのように遊ぶということ、それを大人は言葉だけでやつてゐる。

今コーヒーがここにあるんですけど、コーヒーをたとえばブラックホールに見立てて、それでブラックホールを手に持つてゐる遊び、そういうのをやつてはいるだけだと思うと、すごく自分にとつてもポジティブに、詩は子供の遊びの延長みたいなものだと捉えられた。なおかつそれで思つたのは、人類の言葉は、比喩を重ねていくことによつて、すごく細分

その風景をして語らせる、そういうアリズムの基本みたいなところがあつて、戦後の現代詩のベースになつてゐるような気が僕はしているんですけどね。その辺はいかがお考えですか。

岡本　自分は小野十三郎に全然詳しいわけじゃなくて本当に詩集を一冊読んだぐらいで、直接の影響は受けていませんが、間接的な影響はすごく受けているんだろうと思つています。

もうひとつ小野十三郎といえば、大阪文学学校に行つてすごく自分としては嬉しかつた。学生の皆さんの自己紹介とか式の挨拶のとき

にそれぞれ喋りすぎないようにストップウォッチで測つていて、ユーモアがあつて、本当に気持ちのいい空間で。それでちょっと思つたのは、自分が詩集を出す前に『現代詩手帖』に投稿していたとき、詩を一番取つてくださつたのが福間健二さんでした。亡くなつてしまつたんですけど、彼も國立という東京の郊外のところで、年齢とか出自とか関係なく来たい人が来ていよいよ、という詩の塾、皆で詩を書き合つて、そこにはなかつたんですけど、大阪文学学校にもその匂いを感じた。

文学といつはいい始めていい、どんな年齢で始めていいもので、それを実現する

ための助けになる場所はすごく大事だと思います。それで大阪文学学校に行つて、ちょっと福間健二を思い出すところがあつた。小野十三郎の詩を読んでいても、福間健二を思い出すところがあるのは、市民性と言えばいいのかな、いわゆる小市民というか一般市民というか、普通の人であることをすごく大切にして書いていた。それでちゃんと現実のこの地平に立つて書く、今の社会の、世界の問題とか日本の問題とかを意識しつつ、普通の人としての立場から外れようとしているところ、そこにすごくリスペクトがありますね。

近藤　私も福間健二さんとは、十年ぐらい前かな、この文学学校に来られて会つた。そのときは確か高階杞一さんとか、「ガーネット」の関係だつたかな。奥様と一緒に来られて、何か映画のお話を主にされた。映画も一所懸命されていましたからね。映像が詩と密接に繋がつているのかなと、ほんやり思つたんですけどね。

岡本　小野十三郎の詩も映像的ですね。

近藤　小野さんの後、お弟子さんつて言つていいのか、長谷川龍生さんなんかはドキュメンタリーチックな詩を結構書かれていた。小野十三郎は静止している風景ですが、長谷川さんはそれにさらに動きを持たせていると

● 日本の詩に欠けているもの

岡本　自分のことを叙情詩人だと自分では思つていて、叙事的なものからすごく遠い人間だと思っていて、何か近いような感じの詩祭とか、去年アメリカのアイオワに国際創作プログラムというんで数ヶ月滞在したんですけど、やっぱり日本の詩に政治的なもの、社会的なものがちょっと足りなすぎるんじゃないかなという気持ちはあります。

外から眺めると自分はいわゆる日本的な詩人ですから、社会にむけてなんてあんまり書きたくはないんだけど、他の人があまりにも書かないからちょっとしようがないなどいう気持ちがあつて。小野十三郎がドシンといればよかつたんですけど、もういなくて、優れた詩人もどんどん亡くなつていくので、誰かそういうのをやつてくれる詩人が何人かきちんとといえばいいんだけどな、とは思うんです。それで自分がちょっと何か書くべき瞬間があ

つたら書かなくてはいけないのかなという思いはありますね。

近藤 じゃあ今後岡本さんの詩に、そういうのがうつすらと反映されてくるかもわからぬですね。

岡本 自分はわりと外の世界の影響を受けやすい単純な人間だと思うので、どんな場所に自分が置かれるかによって、詩が自然と変わってくるかなとも思います。

近藤 『現代詩手帖』に投稿されていた時分から、今現在はだいぶ詩に対する想いは変わっています。

岡本 そうですね、今はもう、自分には詩しかないと感じています。当時は何もなかつたんですけど、詩を書いて死んでいくんだろうなという気がします。

近藤 すごい覚悟。

岡本 覚悟というか(苦笑)、他に何もなくて、詩があつただけだと思うんですけど。

近藤 あとちょっと細かいお話で、僕も文学学校で詩の講座のチーチャーをしているんですけど、その受講してきておられる方で、詩を実際に書く場合に、さつきのお話じゃないんですけど、ちょっと頭一つ落としたり、行の尻を揃えたり、句読点をどう打つか、あるいは打たないとか、そういうことすごくこだわる方が結構多い。僕はわりとそんなのは

無頓着な方なんですけど、岡本さんはそういうのはこだわる方ですか。

岡本 なんだかんだ、めちゃくちゃこだわるんじゃないかと思います。この「ノックがあった」に入っている「全ての音がここで聞こえる」というのはかなり長い詩ですけども、このページを開いたときに、どこからどこまでがパッと見開きに入っているか、内容は変わつても位置をすごくずらしたりして、自分としては一番最適な形にしたところがあります。

近藤 やっぱりその見え方、詩の風景が、トータルでの詩という感じ。

岡本 それを読む人が、言葉に触れる瞬間、その瞬間に一番情熱をかけたいところがあります。

近藤 今後その岡本さんが考えられている詩作の展望みたいなものを、ちょっとお聞かせいただければ。

岡本 展望……あんまり何も考えてないんですけど、今は何か真剣に書こう、本当に自分の好きなことを書こうと思うと、閉鎖感のある暗い诗ばかり書いていますね。これは多分今の時代がどこに向かうのかが、自分としてもうあまりにも今の時代のもの見方じゃないかなという思いがあつて、そういうのをアップデートする必要は絶対あるなとは思っているんですけど、ちょっとここ一、二年で完成する気は全くしてないです。

近藤 そうですか。それはでも、将来楽しみです。

岡本 長い目で見ていただければ。

近藤 よく一般的に、詩書く者は詩論を書かないといけないと言われたりして、並行してやつているひともいますね。雑誌とかに、そういう散文的なものも実際に発表されているんですか。

岡本 詩論というほど固いものは発表してい

書いていますね。

近藤 詩集はもちろん今後も出されるでしょうけど、そういう岡本さんの考えている詩に対する思いで、詩論的なものも出したいといふお考えはあるんでしょうか。

岡本 いずれは出したいという気持ちはあるんですけど、まだここ一、二年では無理かなと思います。詩を書き始めた当時に入沢康夫の『詩の構造についての覚え書』を読んで、だいぶもうこの理論は正直古いんじゃないかなで、當時ですら思つたんです。実際古く書かれた構造主義的な解釈というやつは、ちょっともうあまりにも今の時代よりも見方じゃないかなという思いがあつて、そういうのをアップデートする必要は絶対あるなとは思っているんですけど、ちょっとここ一、二年で完成する気は全くしてないです。

近藤 そうですね。

ないです。エッセイ的なものになつていて、ちょっととまだ小野十三郎に顔向けできないものであります。

近藤 (笑)。大学でしたか、詩の講座を持たれてる。

岡本 そうですね、非常勤で教えてます。

近藤 それは実作講座みたいな感じですか。

岡本 講座は詩論という名称なんんですけど、実際は実作をしてくれという大学からのオファーでした。ちょうど文学学校の授賞式で読

んだ小野十三郎の二篇を紹介したりもします。今の学生は、自分から遠く離れた出来事、例えばガザの問題とか興味関心はあると思うんだけど、詩でどうやって表現すればいいかはすごく難しく感じています。

授賞式で読んだ小野十三郎の「一匹の水牛が道を横切る」という詩は、ベトナム戦争を日本にいながらどう書くかという問題が背景にあります。語りの主体が既に死んだ者として登場していく、それでフィクションであることが前提として示している。そのフィクション性があることで、その現場にいない者ができる。それで、こうやつたら書けるんだよということを学生に伝えたりしましたね。

近藤 大阪文学学校でもね、やっぱり元々は小野十三郎さんの作った学校ですから、詩が

中心だったと思うんですけど、最近では朝井まかでさんとか、小説を目指される方が結構多い。やっぱり小説というのはちゃんと大きな賞があるし、経済的にも得られるものがありますから。詩全般に対し、今後の詩に対して、詩を書きたい人に対して岡本さんから言いたいようなことってありますか。

近藤 こういう魅力がありますよとか。

● 詩は滅びない

岡本 そうですね、自分としては、小説の読者を詩が、つまりわれわれが奪つてこなきやいけないという、すこし乱暴な意識はあるんですけど。詩を書きたい人に何か言いたいこと――。

近藤 今実際そんなに多くないじゃないですか、詩を書きたい人。この文学学校でもそうです。だから詩の宣伝するんじやないですけど、詩は今後どういう方向に向かっていくのかなというのは、僕なんかも気になる。

岡本 この状況にたいして日頃、考えているんですけど、まず大前提として、詩が滅びることはある得ないという気がします。言葉と

近藤 そういうのは日本人ですから、自然に出てくる感覚はありますか。

岡本 もちろん全くないとはいえないんですけど、多分世代の上の方と比べてかなり減つてきてると思います。昔、静岡連詩の会というので、町田康さんが、五七は勝手に出てくるもんだからねつて言つていて、いや俺は

近自分のよく言うことで、俳句短歌があるじゃないですか。俳句短歌というのは誰でもある程度ちよつとやれば、形としては完成作品として提出できる。俳句短歌は日本において、詩という名称よりもひろく認知されていて、多くのひとはそれが詩だつてことに気づいてないんですけど、当然外国から見たらとんでもなく詩なわけで、それがもう新聞とか至るところにある。だから、ものすごいこの国は詩の国なんだぞということをまず言いたい。

ただどつちかつていうと詩と小説が分かれちゃつて。日本の小説家は、世界の中でも、小説しか書かないとい作家がかなり多いんじゃないかなという気がしています。小説と詩を同時にやり、読者も同時に読むという世界、この日本にそういう社会が何とか戻つてこないかなという、そういう気持ちはありますね。

近藤 実際に詩を書かれる場合、五七とかそういうのは日本人ですから、自然に出てくる感覚はありますか。

岡本 もちろん全くないとはいえないんですけど、多分世代の上の方と比べてかなり減つてきてると思います。昔、静岡連詩の会というので、町田康さんが、五七は勝手に出てくるもんだからねつて言つていて、いや俺は

谷川俊太郎の翻訳絵本とか、そういう五七ではない日本語で育つてきていますから。五七は、自分の中では人工的に生み出そうとしたいと、なかなか出でこないリズムではあるかなと思います。

近藤 現代詩は、短歌とか俳句の世界とあまり関わりを持つてこなかつたということがありますね。昔、岡井隆さんとかがいろいろ書かれたりしましたけど、広義には同じ詩なのに、短歌俳句とのつながりが確かに薄いところがありますね。

岡本 最近さつきの国際創作プログラムでタイの詩人と話したんですが、タイも自由詩が弱くて、形式がしつかりした詩、伝統的な詩がすごく強いらしいんです。でも他の東南アジアの国々はわりと自由詩の方も強くなつていて、それぞれ伝統的な詩型があつたけれど、自由詩の方が強くなつていて。

タイの詩人と話していくて思つたのは、やっぱり植民地化されたかどうか。欧州や日本に植民地化された国というのは、自國の伝統的な詩型が破壊されて、より早く自由詩、いわゆる現代詩的なものに接近して、それが広まつているところがあつて。そういう歴史的な観点に立てば、俳句短歌がめちゃくちゃ嫌いだつたんですけど、俳句短歌というのもすぐ日本にとつては大事なもので、これがある

ということは、それだけで尊いことなんだ、最近ようやく思うようになりました。

近藤 私も高校時代からもう古典が苦手で。

岡本 全く同じです(笑)。

近藤 今になつて後悔しているんですけどね。でも確かに、そういうのが重要なだと後で気がつくんですね。話があつちこつち行きまして、そろそろ時間です。このへんで終わらたいと思うんですけど、最後に何か詩について一言おつしやつていただければと思います。

岡本 詩について——。今、文学学校の方でも小説が多いと仰つていたけど、詩つてやっぱり簡単ではあると思うんです。真剣に取り組むとめちゃくちゃ難しいけど、自分と自分の作品との距離感というか、それがすごく近くて、誰でも手を伸ばして数行書けばそれが詩になるという、人間にとってものすごく身近なもので、より良い作品をと思えば特別な学校があつてたしかに訓練が必要ではあるんだけど、それでもやっぱり小説と比べると、もうちょっと気軽なものだと思います。これを何とか日本社会で広げたい。

近藤 そうですね、今のお話、すごくいいお話を文学学校に来られている皆さんも興味を持たれるお話を思うんです。ただ、詩は自由すぎるというか、とつつきがすごく悪いと

於 大阪文学学校 二〇一五年一〇月六日

いうか、そういうもんであるという印象を僕も持つてゐる。岡本さんはまだ年齢的にも若いですし、これから詩を広げていっていただける方だと、すごく期待しておりますので。ご活躍をお祈りします。ありがとうございます。

岡本 ありがとうございます。皆さんにどうぞよろしくお伝えください。